



1. 報告会では、市長をはじめ関係者各位が全力で走り抜いた選手たちの労をねぎらった / 2.3 区 (5.8*㊦) で7人の選手を抜いた佐藤陸斗さん / 3. ゴール地点で選手を迎えるコーチの佐藤靖浩さんと、全力で走り抜いた主将の渡邊忠幸さん / 4. 親子で出場した白坂冬聖さん (左) と白坂奈津子さん (右)

「沿道からの声援を力に」

11月19日㊦、ふくしま駅伝が行われ、伊達市の選手たちが懸命にタスキをつなぎました。中高生など若い世代の活躍や社会人たちの安定力がチームを支え、96.3kmの道のりを5時間45分31秒で駆け抜け、全体25位、市の部12位となりました。ゴール後の報告会で、主将でアンカーを務めた渡邊忠幸さんは「沿道からの声援が4年ぶりに解禁された今大会、温かな声援が力になり、チーム一丸、総力戦で臨むことができました。応援ありがとうございました」と今大会を振り返りました。選手の皆さん、すばらしい走りを見せていただきありがとうございました。



市長コラム 第61回 「空港ピアノ」

須田博行

空港ピアノをご存じでしょうか。東日本大震災で津波にのまれ、多くの人の力でよみがえった「復興ピアノ」です。仙台空港に期間限定で設置され、空港を訪れた人が自由に弾くことができます。その映像が12月15日にNHKで放送されました。

最初にピアノの前に座ったのは、神戸から来た青年でした。東日本大震災が起きたとき最初に思ったのは、日本中からの支援で復興した神戸のまちなことだと思います。ひとごととは思えず募金活動を行ったそうです。

弾きはじめたのは、坂本九の「上を向いて歩こう」。明るく軽快な演奏でした。いろいろな場面で耳にし、また自分でも歌うこともありましたが、いままでこの曲で涙が出ることはありませんでした。でも今回は、上を向かないと涙がこぼれてしまうことを経験しました。番組ではその後4人が演奏し、

最後の演奏は、童謡「故郷」でした。私がとても好きな曲です。演奏者は、震災のとき仙台の大学の音楽科に通っていて、仲間と被災地を回ってこの曲を弾いたそうです。家族や故郷を思い涙する人から「ありがとう」と感謝されたことで、逆に自分が励まされたと言っていました。

この復興ピアノの演奏でなぜ涙が出るのか。ピアノをよみがえらせた人たちの想いと、演奏者の被災地に寄り添う気持ちが、ピアノに命を吹き込んだからだと思います。

音楽は、悲しいときには心を癒し、辛いときには力を与え、楽しいときはより楽しくさせてくれる。その時々に合わせて人の心に寄り添ってくれます。音楽を創るのも、歌うのも、奏でるのも、そして聴くのも「人」です。人を通して想いが通じ合えるからこそ聴く人に感動を与える。それが、音楽の持つ変わらぬ力だと思います。